

# 「うめ」(梅)の語形の音韻史的研究

橋 本 有 紀

## 目次

はじめに

第一章 日本語「うめ」の成立について

第二章 伝存資料に見られる「梅」の表記

第一節 平仮名文

第二節 辞書

第三節 ローマ字文(キリシタン資料)

第三章 「梅(うめ・むめ)」の音価の推定

第四章 今後の課題

おわりに

## はじめに

授業で、あるテープを聞いたことがあった。ゆっくりとした口調にもかかわらず何を言っているのかよくわからなかったが、それは平安時代の発音の復元を試みた『源氏物語』の朗読だったのである。現在私たちが読む『源氏物語』とは全く違うもののように大変驚いたのと同時に、古代の音韻について興味をもったのである。

私たちが日常何気なく使っている言葉も、時代から時代へと様々

な変化をしてきた。言葉は古人から受け継がれてきた貴重な財産である。その歴史は深い。この貴重な財産である言葉をより深く自分の中に受け入れるためにも、その歴史を知ることが重要だと思われるのである。

本稿のテーマである「梅」という言葉は、その花とともに古くから私たち日本人の間で親しまれている。その「梅」がどのような歴史をもっているのか、これから探っていきたいと思う。

## 第一章 日本語「うめ」の成立について

「梅」の歴史を探っていく第一歩として、どのように日本語の「うめ」が成立したのかということを考えていくことにする。

驚くべきことであるが、「うめ」というたった二文字に管見の範囲でも次のような十通りの語源説がある。

- 1 「梅」の字音メが変化した語。
- 2 最初「烏梅」として入ってきたものか。
- 3 ウツクシクメヅラシキの略。
- 4 美称。ウベ(宜)の転用。
- 5 ウヅメ(珍品)の略。

6 ウメ(愛目)の意から。

7 ウキメ(浮目)の略。冬を忘れて浮き浮きと見える花の意。

8 ウムミ(熟実)の約転。

9 ウマセ(熟)の転。

10 ウミ(大実)の転。

以上のどの説を見ても、私にはうなずかされるものばかりである。

しかし、日本語の「うめ」の成立について忘れてはならないことがある。

一つは「うめ」という言葉が「梅」という漢字と共に日本に入ってきたということである。

このことは「うめ」という言葉が古くから存し、それに「梅」という漢字をあてたのではないということの裏付けとなる。従って、3から10のように別の語の略や約転から「うめ」という言葉ができたとは考えられない。

もう一つ忘れてはならないことは、「うめ」という言葉が漢語から出来たということである。

「うめ」に限らず、日本語は外来語からかなり多く出来ていると言われている。しかもその過程は複雑なのである。

それでは、「うめ」はどのようにして出来たのであろうか。

「梅」の中国音は「mei」である。これが変化を重ね「mei」となり、最終的には日本語の音節構造に合わせて「ume」と開音節化されたのではないかと私は考える。この考えは少し無理があるかもしれないが、最初から「うめ」として日本に入ってきたとは思えない。何らかの変化があったことは間違いないのである。

しかし、「うめ」という語が外来語から出来ているにもかかわら

ず、全くそのように感じさせないのは、いかに「梅」という花が古くから親しまれてきているかということ物語っているように思われてならない。

## 第二章 伝存資料に見られる「梅」の表記

### 第一節 平仮名文

さて、現在「梅」という漢字は「うめ」と仮名表記されるということは当り前のことであるが、古典書で「梅」が「むめ」と表記されているものがあるということも知られるところである。このように「梅」という言葉も時代によって表記の仕方に相違があるという点に注目して、この章では平仮名文、辞書、キリシタン資料のそれぞれについて具体的に表記の仕方を見ていきたいと思う。

最初に平仮名の表記について述べてみたい。まず、私が調べた資料を年代順に紹介しておく。(ここでいう年代とは資料が書写された時のことであって、成立年代とは必ずしも一致しない。)

『枕草子』『源氏物語』『更級日記』『金槐和歌集』『大和物語』『今鏡』『栄花物語』(以上鎌倉時代)

『詞花集』『和泉式部日記』『増鏡』(以上室町時代)

『土左日記』『山家集』『後拾遺和歌集』『新勅撰和歌集』『狭衣物語』『萬葉集』『発心集』『御伽草子』『松葉名所和歌集』

『続松葉集』『落窪物語』『竹むぎが記』『かげろふ日記』『宇津保物語』『徒然草』(以上江戸時代)

このように平仮名文の資料は豊富で、時代も鎌倉時代初期から江戸時代後期と幅広い。

これらの資料の表記は次のような三種に分類できる。

(1) 「うめ」と「むめ」の両方を用いている表記

(2) 「むめ」と「梅」を用いている表記

(3) 「梅」のみの表記

鎌倉、室町、江戸時代とも(2)、(3)のような表記が多かった。また、現在のような「うめ」のみの表記が一例も見られないことにより、これらの時代の仮名表記は「むめ」が一般的であったということができる。

さて、これらの時代には(2)、(3)のような表記が多いと述べたが、「うめ」のみの表記がなかった所に少数ながら「うめ」という表記が出て来た(1)のようなものには注目しなければならぬ。前出の資料の中で(1)のようなものは『山家集』と『御伽草子』の二例しかなかったが、これらの文献には江戸時代初期に書かれたという共通点があるのである。もちろん、同時代前後に書かれた他文献には「むめ」の表記がはるかに多いが、この頃から「うめ」という表記でも「梅」を表し始めていたといえる。

何故このような相違が生じたのかということとは断定できないが、当時の「むめ」という発音に多少関係があるのではないかと私は考える。発音については次の章で考えていくことにするが、発音と表記との密接な関係から考えれば、この問題は非常に重要なことであると思われる。

以上述べたような発音に要因があったかなかったかというのは別にしても、江戸時代初期に表記の変化に関わる何らかの要因があったということは言えるであろう。

## 第二節 辞書

辞書として取りあげた資料は、観智院本『類聚名義抄』黒川本『色葉字類抄』『中世古辞書四種』『文明本節用集』『古本節用集六種』である。これらはいずれも鎌倉、室町時代の辞書であり、当時の漢字の仮名表記を再現できるものである。

さて、平仮名文と同様にこれらの辞書における「梅」の表記を分類してみると次のようになる。

(1) 「うめ」、「むめ」の両方を用いている表記

(4) 「むめ」のみの表記

(4)のような表記は前節で述べた平仮名文と通じる所があるが、(1)のような表記は平仮名文との表記の問題が生じてくるのである。

それは、平仮名文では鎌倉、室町時代の表記に「うめ」は一例も見られないのに、当時の辞書には表記が存在していたということである。

このように、辞書には「ウメ」表記が存在するのに和文の本文中にそれが見られないのは何故だろうか。

残念ながら私が調べた資料には鎌倉時代以前のものが一例もないのだが、上代(奈良時代とそれ以前)には「梅」は「字梅」「于梅」「烏梅」のように書かれているようである。この「字」「于」「烏」は現在の「う」にあたるものであり、これらの時代は明らかに仮名表記の「うめ」にあたるもので表していたといえる。

それが平安時代に入ると多くの漢語が日本語の中に取り入れられた結果、今まで語頭に立つことがなかった「む」が立つようになつたのである。従って平安時代に入り、「むめ」という表記が生じて

いったのである。

鎌倉時代以後「むめ」が主流になったのは、平安時代からの表記がそのまま受け継がれ広まったと考えられる。しかし、辞書に「うめ」の表記があるのは、平安時代以前の表記がわずかに辞書によって伝えられてきたからではないだろうか。あるいは鎌倉、室町時代にも「うめ」という表記があったかもしれない。

いずれにしても、鎌倉・室町時代の辞書からもだんだん「うめ」という表記は見られなくなっていく。古人から受け継がれてきた表記がなくなっていくというのは残念に思えてならない。

### 第三節 ローマ字文(キリシタン資料)

ローマ字文(キリシタン資料)として『天草版平家物語』『日葡辞書』『落葉集』を取り上げて見た。

始めに資料についてふれておく。

『天草版平家物語』は宣教師の日本語学習のための教科書のようなものであって、ローマ字文で当時の口語が書かれている。従って当時の口語を知る上で重要な資料であるといえる。

『日葡辞書』と『落葉集』は共に辞書であるが、性格は全く違うものである。

『日葡辞書』は日本語を見出し語とするポルトガル語の対訳辞書で、ポルトガルの宣教師たちが日本語を修得するために作られたものである。中世国語の諸相が見られ、『天草版平家物語』と同様に当代国語の研究資料としての価値は高いものである。

『落葉集』は『節用集』などを資料として集成された辞書であ

る。日本語に特有な漢字の機能を明らかにするために編まれた字書であり、学者以外の一般の人々の要求に応ずるものであったので、俗語もかなり収められている。

さて、これらを平仮名文、辞書と同様に分類してみると次のようになる。

(4) 「むめ」のみの表記

(5) 「Vme」のみの表記

ローマ字本の資料があるため「Vme」という表記が見られる。このローマ字の表記は、仮名遣いなどに関係なく、当時の発音を忠実に写すことを主眼としているので、当時の口語を知る上で重要であるというのには既に述べている通りである。

それでは「Vme」とは現在の仮名表記ではどのように記されるのであろうか。

「Vme」の「V」は語頭に限って使用されていたものであると言われている。普通は「U」を使用していたが、「V」も「U」も発音上の違いはなかったと思われる。

もしこの時代に「むめ」という発音をしていたならば、ローマ字表記では「mume」となるはずである。

従って、この「Vme」は仮名表記で「うめ」にあたるものであるといつて良いと思う。

すると、やはり中世(鎌倉、室町時代)には「うめ」という表記があったのではないだろうか。この問題は次の章で取り上げる音価の推定と関係があるのではないかと考えている。

### 第三章 「梅(うめ・むめ)」の音価の推定

古語を読む上で最も注意しなければならないことは、音価の推定をせずに現在の発音で読んでほならないということである。表記が現在と同じでも発音は違うことがあるのである。

「梅」の場合、同一時代に表記の相違(うめ・むめ)があるので、発音はとても曖昧であったと推測できる。

音価の推定をする際に重要な資料となるのが、当時の発音を忠実に写すことを主眼としているローマ字文である。従って、ローマ字文で表記されている「Vme」の発音を考えていけば、当時の発音はだいたい推測できるということになる。

さて、問題になる「V」の発音であるが、ロドリゲスの『日本大文典』には次のような記述がある。

V(う)の音節が言頭に於いて Ma(ま)・Me(め)・Mo(も)の前に立ってゐるものは、明瞭なVでなく、閉じた口の中で発音してそのまま抑止されるのである。(土井忠生訳注 六三八・六三九頁)

実際にこのように発音してみると、「う」「む」「ん」のどの音ともいえないというのがよくわかる。

これは口を閉じたまま発音する言葉が日本語には存在しないため、そのような語を表す仮名も存在しないのである。

では、その仮名を表すことのできなかつた発音とはどのようなものであったのか。

考えられるのは「m」という発音である。この音は「う」でも

「む」でもない。「ん」に近いが完全な「ん」でなない。この発音は口に閉鎖を作り鼻の方にひびかせる鼻音である。今日では発音するのは少し難しいが、この音が語頭に現れることがしばしばあったのである。

このようなとても曖昧な発音であったので「梅」に「うめ」「むめ」という二種の仮名表記が現れたのではないかと想像する次第である。

### 第四章 今後の課題

この論文を書いていくうちに、次のようないくつかの疑問が出てきた。

一、本文中(第二章第二節)に、上代では「梅」は「烏梅」などと表記されており、これは「うめ」という仮名表記にあたるらしいと述べたが、本当にそのようなことが言えるのかどうか。

これには、平安時代の実際の写本が現在まで伝わっていて、音韻などの分野では和文資料よりも価値の高い資料となる訓点資料を調べてみる必要がある。

二、平仮名文には「梅」という漢字表記のみしかなかった資料がかなり多くあった。もしかししたら、仮名表記が使用できなかつた理由があるのではないか。「うめ」「むめ」という仮名表記の相違にも関係があるように思われる。

三、現在では仮名表記は「うめ」としか書かれない。いつ頃から「むめ」とは表記されなくなつたのか。また、その要因は何であるか。江戸時代以降の作品を調べてみなければならない。

四、「うめ」「むめ」の音価の推定には、ローマ字本以外にもいろいろな資料を調べてみる必要がある。そうすることによって、新たな発音の可能性が生じてくるであろう。  
以上の四点を中心に、今後の研究課題としていきたい。

#### おわりに

「梅」というあの小さな花の名にも歴史があるということに、改めて感心している。本当はもっと深い歴史があるに違いないが、私の準備不足のため、表面的な歴史しか見ることができなかったのは、非常に残念なことである。

しかし、言葉の歴史というものを見てきて、私の中で言葉というものに対する見方が変わってきているのは事実である。どの言葉にも私の知らない歴史があると思うと、大切にしていかなければならないと思うのである。

我が家の小さな庭にも、梅の木が一本はえている。この論文で梅の歴史を少しでも知った今、今までは違う梅の花を見ることができらるであろう。

#### 主要参考文献

- 『類聚名義抄第壹・貳卷』 正宗敦夫校訂 風間書房 昭和39  
『色葉字類抄研究並びに索引本文・索引編』  
中田祝夫・峯岸明編 風間書房 昭和39  
『中世古辞書四種研究並びに総合索引影印篇・索引篇』

- 中田祝夫・根上剛士著 風間書房 昭和46  
『改訂新版古本節用集六種研究並びに総合索引影印篇・索引篇』  
中田祝夫著 勉誠社 昭和54  
『改訂新版文明本節用集研究並びに索引影印篇・索引篇』  
中田祝夫著 勉誠社 昭和54  
『邦訳日葡辞書』 土井忠生・森田武・長南実編訳  
岩波書店 一九八〇年  
『邦訳日葡辞書索引』 森田武編 岩波書店 一九八九年  
『日本国語大辞典第三卷』 日本大辞典刊行会編集  
小学館 昭和48  
『日本古典文学大辞典簡約版』 日本古典文学大辞典編集委員会  
岩波書店 一九八六年  
『御伽草子総索引』 榎原邦彦・藤掛和美・塚原清編  
笠間書院 昭和63  
『日本古典文学大系38 御伽草子』 市古貞次校注  
岩波書店 昭和33年  
『西行法師全歌集総索引』 白田昭吾編  
笠間書院 昭和53  
『日本古典全書 山家集』 伊東嘉夫校注 朝日新聞社 昭和22  
『耶蘇会板落葉集総索引』 小島幸枝編 笠間書院 昭和53  
『天草版平家物語対称本文及び総索引本文篇・索引篇』  
江口正弘著 明治書院 昭和61  
『国語音韻史』 橋本進吉著 岩波書店 一九六六年  
『新訂国語史要説』 土井忠生・森田武著 修文館 昭和30  
『日本大文典』 J. ロドリゲス原著 土井忠生訳注

三省堂 昭和30

『漢語林』 鎌田正・米山寅太郎著 大修館書店 昭和62

『国語教育のための國語概説』 山田正紀著

星野書店 昭和10

【評】

一、綿密な調査に基づく推論を重ねており、望ましい姿勢である。

各節の論のもととなる具体例を挙げてから考えるところが記されたならば、さらに説得力のあるものとなったであろう。

一、「梅」の実際の音価が「me」であったという解釈は、あたっていると思う。

おそらく、考察の対象となった各時代を通して、そうであったのであろう。論文中にも引かれている『三卷本色葉字類抄』は、「梅」の語を、「ウ」の部にも、「ム」の部にも記している。これは、実際の音としては一音「me」であったが、当時、「ウメ」「ムメ」の両方の表記が存したため、辞書編者が、両方の部に挙げざるを得なかったためと考えられる。

一、「今後の課題」に記された問題は、いずれも現時点での問題点を的確にとらえたものである。それゆえ、一一の問題については再記しない。今後の研究の進展を期待したい。

一、「梅」の語の仮名表記と発音との関係については、亀井孝「梅咲きぬどれがむめやらうめじゃやら」(『国語と国文学』61―3)の論考が有る。筆者の本意を理解しにくい論文であるかもしれない

いが、是非とも「主要参考文献」に挙げてもらいたかった。

結論的には、亀井氏と同じ考えに達したようであり、亀井氏の考えを、具体的用例によって裏づけた論文として、本論文は評価できる。

(佐々木 勇)